



埴谷雄高作品集

死
霊

1

河出書房新社

埴谷雄高作品集 1 ©1971

一九七一年三月二五日初版発行 一九七四年九月二五日十版発行



著者——埴谷雄高

装画——駒井哲郎 装本——杉浦康平

発行者——中島隆之

発行所——株式会社河出書房新社 東京都千代田区神田小川町三一六 電話 東京 二九二—三七一一 振替 東京 一〇八〇二

印刷者——多田 基 印刷所——多田印刷株式会社

製版印刷——凸版印刷株式会社

製本所——小高製本工業株式会社

壇谷雄高作品集——I

死
靈



目次

7—294 死靈

295—311 『死靈』考——吉本隆明

313—324 解題——白川正芳

自序

ここにやつと序曲のみまとまつたこの作品について、その意圖を述べるつもりはない。けれども、この作品が非現實の場所を選んだ理由については一應觸れておきたい。開卷冒頭にこの世界にあり得ぬ永久運動の時計臺を掲げたのは、*nowhere, nobody* の場所から出發したかつたためであり、また、そのような小さな實驗室を設定することなしにこの作品は一步も踏み出し得なかつたのだから。

非現實——この言葉はそれ自身多くの問題を含んでいる。私自身の解釋によればこうである。そこは虛妄と眞實が混沌たる一つにからみあつた狭い、しかも、底知れぬ灰色の領域であつて、嚴密に言えば、世界像の新たな次元へ迫る試みが一步を踏み出さんとしたまま、はたと停止している地點である。謂わば、夢と覺醒の間に横たわる幅狭い地點である。私はかかる地點を愛する。けれども、また同時にかかる地點から一步も踏み出し得ない自身に私は苛らだつ。私はそこから一步も踏み出したくない。にもかかわらず、私はその一步を踏み出さねばならない。

一種ひねくれた論理癖が私にある。胸を敲つ一つの感銘より思考をそそる一つの發想を好む馬鹿げた性癖である。極端に言えば、私にとつては凡てのものがひややかな抽象名詞に見える。勿論、そこから宇宙の涯へまで擴がるほどの優れた發想は深い感動からのみ起ることを私は知っている。水面に落ちた一つの石が次第に擴がりゆく無數の輪を描きだす音楽的な美しさを私は知っている。にもかかわらず、私は出來得べくん

ば一つの巨大な單音、一つの凝集體、一つの發想のみを求める。もしこの宇宙の一切がそれ以上にもそれ以下にも擴がり得ぬ一つの言葉に結晶して、しかもその一語をきつぱり叫び得たとしたら——そのマラルメ的願望がたとえ一瞬たりとも私に充たされ得たとしたら、こんなだらだらと長い作品など徒らに書きつづらなくとも済むだろう。私はひたすらその一語のみを求める。けれども、恐らくその出發點が間違つてゐる私にはその一つの言葉、その一つの宇宙的結晶體はつねに髮一筋向うに逃げゆく影である。架空の一點である。ついに息切れた身をはたと立ち止まらせる私は、或るときは呻くがごとく咏嘆し、また或るときは限りもなく苛らだつ。そして、ついにまとまつた言葉となり得ぬ何かがそのとき棘のような感嘆詞となつて私から奔しり出る。即ち、*ada* と *phiri* 私にとつて魂より奔しり出る感情はこの二つしかなく、ただそのみを私は亂用する。

このような忌むべき事態は、勿論、私個人の歪んだ能力に由來するに違ひない。と同時に、そこには私達が置かれた不幸な位置というものもある。例えば、『大審問官』を讀むとき私が肌身に覺えるのはそのような荒涼たる場所である。説き去り説き來つて懸河のごとく辯證する大審問官に對してキリストは最後まで黙して答えない。Uzi (説き終つた) という言葉が吐かれたとき、キリストははじめて永年の霜を置いたような大審問官の唇にびくりと接吻する。偉大なる憂愁につつまれた大審問官の魂がそのとき雷撃をうけたように震撼する。その魂は確かに震撼せざるを得ない。何故ならキリストの無言の接吻のなかには瞑想と殉教と流血に積み上げられた數千年の歴史が結晶してゐるのだから。そして、そのとき、私達は知る、『大審問官』の作者の苦惱が如何に深く強烈なものであれ、彼はなお(私達と較べてより強烈に幸福なことには)腕をうちおろせばかちんと敲ちあたつてはねかえる數千年の堅固な實體の上に支えられてゐることを。もしこの私達が一つの底知れぬ重味をもつて沈黙しつづけるキリストを描くとすれば、その作品中に數千年にわたつて積み上げられた歴史をも創り出してみせねばならない。それは疑いもなく不可能である。私達は巨大な幅廣い人類史のなかに投げこまれた一匹の哀れな鼠のごとくにデモクリトスからヘゲルへ至るまでの膨大な積

荷の間をちよこちよこ嚙り歩いた。けれども、一つの積荷からぼろくずをひきずりだすごとくに恐慌とつづき走り、一つまみの断片のみを口に含んで踊つた私達はいまだにその一つ一つの味を詳らかにせぬ。私達はちやちなソクラテスであると同時にちやちなソフィストの徒であり、一瞬合理的でまた一瞬非合理的で——要するに單純素朴なてんやわんやなのであつて、一貫せる論理的思考の持續にはとうてい耐え得られぬというのが私達の精神の位置である。けれども、私達の不幸は私達が嚴然確固たる實體の上に立脚していないことなのではない。もし私達が風のごとき氣分のみにまかせる單なるてんやわんやの徒であるならば、そこにはまた不幸な事態も幸福な境地も何ら問題になり得ないだらう。私達にとつての不幸は、私達がその發想を最後までつきつめ得ぬてんやわんやの徒であるにもかかわらず、なお私達に一定の受容能力が備つていよう一點にある。大審問官の論證を自ら築き得ぬにもかかわらず、その偉大なる憂愁はその皮膚に感得される——これが私達を未來へひきずりゆく不幸である。

それは前へひきずりゆく不幸である。苦難な未來へ踏み出さなければならぬ不幸である。とうてい動かし得ぬ手足をなお動かさなければならぬ不幸である。私個人についていえば、私は『大審問官』の作者から、文學が一つの形而上學たり得ることを學んだ。そして、その瞬間から彼に睨まれたと云い得る。私は彼の酷しい眼を感じる。絶えざる彼の監視を私は感ずる。ただその作品を讀んだというだけで私は彼への無限の責任を感ぜざるを得ないのである。それは如何に耐えがたい責任であることだらう、とうてい不可能な一歩をしかも踏み出さねばならぬということ。私はついにせめて一つの觀念小説なりともでつち上げねばならぬと思ひ至つた。やけのやんばちである。けれども、その無暴な試みの如何に羸弱なことであるだらう。例えば、私がこの作品中に扱つた《虚體》という馬鹿げた觀念をとり出してみてもよい。この僅か一語に到達するためには、私には私なりの苦勞がなかつた譯ではない。けれども、ひとたびその語が白紙の上に書き下されてしまえば、それは他のさまざまの觀念のなかに泡のごとく消え失せてしまつてもはや跡形もない。微風のなかに搖れている一本の枯れた樹ほどの持續する表現力も持ち得ないのである。重味なき觀念のもろさで

ある。とはいえ、私はその脆い碎けた場所から出發せねばならない。

このような荒涼たる場所に置かれたとき先人達が如何なる方法をとつたかを見たとき、私には一つの姿勢が目にとまつた。そこにはさまざまな型があり、或るものはそこで地上に密着する藜苔植物的に生きのびていたが、或るものははじめから枯死の擬態をとつて立つていた。擬態——そうである。特殊な風土のなかにとにかく一本の樹幹を延ばした形で立つているその姿勢に擬態という名稱を附して恐らく誤りではないだろう。死んだ眞似でもしていなければとうてい自身が持ちきれなかつた彼等の精神に深い興味を覺えたばかりでなく、遺憾なことには、私はそうした姿勢に親近性のみ感じた。そうである。それは遺憾な親近性であつた。何故ならベェコンによつて既に數世紀前に擊破された洞窟の偶像がなお私達の裡にとごろを捲いているのを私は感じたから。けれども、ということはまた同時に、うまく死んだふりをしてみせる隠れ蓑を私自身たとえ神の目を盗んででも案出すべきやけのやんばちな衝動を感じたということともまつたく同じことであつた。その遺憾なやけのやんばち的心情の分析にはここではたちいる必要もない。私が敢えてここで觸れたいのはその結末の姿勢だけである。その結果、私がとつたのは次の三つの方法なのであつた。即ち、極端化と曖昧化と神祕化——。

前述したごとく私には一種ひねくれた論理癖がある。せめて徹底出来るところまで踏みこみたい。もし不可能ならば、ごまかしてでも通りぬけたい。ごまかしが見抜かれてもなんとか灰色のヴェールをかぶせておけ。以上が私を支えている體系である。こんなたよりない中世の呪術的方程式に従つてとにかく私流の一貫性を保っているのが、私の示し得る唯一の姿勢なのであつた。明晰と嚴密——いまだ私の精神を飾つていないその協和音を渴求していない譯ではないけれども。この場合、あとに並べられた二つの方法は謂わば比較的單純な擬態法であつて殆んど説明を要しない。つまり、作中隨所に見られるごとく、*pose*の濫用、反覆の濫用、或る期間までの心理描寫の省略、探偵小説的構成等々々。けれども、第一にとりあげられた極端化の方法については、非現實の場所をこの作品が出發する場所と述べた以上その大要を説明しておかねばな

らぬ。一般的にいつて、思考は本來事物の根源と極限へまでひたすら辿りゆくものであるから、敢えて極端化と呼ぶとも、思考本來の道行きをそのまま辿りゆけば、屢々、いわゆる思考實驗の領域へまで踏み込むに至るのだらう。私のひそかな願望はかかる實驗をここで行いたいということのみにかかつてゐる。けれども、ひねくれたちやちな論理癖しかたぬ私はただ私流の極端化の原則を歪んだ形で貫ぬくばかりである。屢々が行うそれは、もしそういつてよければ、妄想實驗の領域に屬すると規定して好い類のものである。そうである。そして、それはそれ以外の何物でもない。そして、このような愚かしき無力な實驗遂行の故にこそ非現實の場所から私は出發しなければならなかつたのである。

嘗て耆那教の聖典に接したとき、私には一つの奇妙なヴィジョンが浮んだ。耆那教とは印度古來より現在までもひきつづいてゐる戒律酷しい一教團であつて、嘗て私が述べるような事實など存しなかつたが、私は私自身の法則に従つてその素朴な教儀を私流の領域へまで極端化してみたのである。そのとき浮び上つてきたヴィジョンとはこうである。その教團はその頃餓死教團といわれていた。着ること飲むこと食うことはおろか呼吸すらその信徒達は禁ぜられていた。従つて、教團の信徒達が集り籠つてゐる或る高山へ登りゆくと、その途上の此處彼處にミイラ化し或いは風化したひとびとの屍體が無數に見受けられた。けれども、如何なる理由によるのか、該教團の始祖大雄のみは深く暗い洞窟の奥にその瞑想的な眼を光らせて生きていた。菩提樹の下で釋迦が正覺し無窮の碧空を眺めあげたとき、ふと想ひ出したのがこの大雄である。(事實に於いては彼等の年代は遺憾ながらややずれていて彼等は互いに相知らなかつたが、私の極端化の法則はここでも時間的、空間的な事實の拘束など無視する。)ヒマラヤに似た美しい白い雪をかむつたその高山へ辿り着いた釋迦は深く暗い洞窟のなかへ大雄の前まで靜かに進んでゆく……。これが私のヴィジョンの出發點である。この釋迦と大雄の對話の章は作中人物が語る一つの物語としてこの作品の最後近く現われる筈であつて、この作品全體の觀念の中心をなしている。この作品が非現實の場所から出發するというとき、その設定には、登場人物達がフィールの陰畫のごとく暗く處理されるという意味も含められてゐるのであるが、かかるネガ

ティヴな作中人物達の中心に坐つてゐるのが全否定者大雄なのであつて、彼等は彼の觀念の部分をそれぞれ擔つて歩いてゐるに過ぎない。

さて、そうであるとして――。

宇宙の涯から涯へまで響きゆく一つの巨大な單音の幅を検證すること、それは確かに一つのヴィジョンに他なるまい。それは確かにあらゆる先人達をひきずり歩ませた一つの光源に他なるまい。けれども、もしこの光榮ある用語があまりに暗過ぎる私の領域に似合わしからぬとすれば、私は私自身の用語をもつて、それを一つの架空擬視と名づけても好いのである。私の魂は、廣大な眞空の一點にはたと立ち止まる。私は、架空を擬視する。そして、そこに行われる一種の精神の體操、私はここに設定された小さな實驗室がもつ意味をそれ以上に豫定してゐない。巨大なサイクロトロンやダイナモが旋回する現代、ものものしいランビキやフラスコをごたごたと並べたてて效果零の古ぼけた鍊金術にとりかかった以上、その他につけ加えるべき意味などあり得ないのである。

私が本巻を序曲と呼ぶ理由は、てんやわんやの息切れする能力をもつてとにかく三つの主導音をここに敲つたというだけの理由である。第一から第三主題の展開へいたるまで。だが、まだ何事もはじまつてゐないのである。この作品が扱うのは五日間の出來事であるが、だからと長いスタイルで書きつづけてゐるため、この序曲を終つてようやく第一日目の夕方まで達したに過ぎない。徹夜など氣にもかけず飛びまわつたが、作中人物達の氣配を窺い看るとき、前途の遙かさにいささか恐慌の情を禁じ得ない。

死靈

